

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第八回

著者 中川由香

大鳥圭介の人生を辿ると、因果や巡り合わせが大きく意識されます。薩摩藩出身の黒田清隆は、圭介の人生を語る上で欠かせない人物です。黒田は北海道開拓使の長官、農商務大臣、第二代目内閣総理大臣等を歴任した、新政府の重鎮中の重鎮でした。一方黒田は、圭介の洋学の生徒であり、戊辰戦争では敵将であり、圭介が投獄されて死罪になる所を救った人物で、圭介が仕えた新政府の開拓使の上官でした。まさに数奇な関係と言えるでしょう。

圭介は江戸での貧乏書生の頃、薩摩藩の依頼で洋書の翻訳や台場の設計を行い、高い評価を受けていました。やがて圭介は、芝（今の浜松町近辺）の江川塾の講師に抜擢されました。その教え子に、薩摩藩の留学生が沢山いました。黒田や大山巖、伊東祐磨ら、後の陸軍海軍の将星に、圭介は砲術や算術を教えました。彼らは薩摩に戻り新政府軍の主力となりました。一方、圭介は幕府に近代軍事技術を導入、洋式陸軍を育て、彼らとは道を分かちました。

その十一年後、戊辰戦争にて、大山とは会津戦争の母成峠で対戦しました。また野津道貫は、宇都宮で圭介と戦い、太股に銃弾を穿たれました。そして「大鳥の戦略は神のようだ。我々は負けても恥でない。なぜならば大鳥の翻訳書で練兵のことを習ったのだから、向こうはお師匠さんだ」と語りました。野

津はこの二十七年後、軍司令官として日清戦争で公使の圭介に再会しました。この時の事について彼が文句を言った所、圭介は「気味の良いことよ」と笑って返したと、野津は回想しています。さらに後年圭介は、靖国神社の遊就館に、薩摩の元で自分の設計した大砲そっくりのものが展示されているのを見ました。展示は実際に戊辰戦争で用いられたものです。薩摩の砲撃に圭介らは会津・箱館戦争で甚大な損害を出しましたが、その出所は、薩摩にもたらした自分の知識だったというわけです。

戊辰戦争後、圭介は辰ノ口糾問所（現在のパレスホテル）に収監されました。ここで「植木屋藤兵衛」という人物から、牛肉などの食料、陸軍用毛布など衣糧、金銭、禁制の紙や筆等の、頻繁な差し入れを受けました。当時入手の難しい品も多いことから、これが黒田である可能性は高いと思われまます。この牢獄は、圭介が幕府陸軍時代に、自分で設計し建設したものでした。自分の建てた牢に自分が囚われた逸話を、圭介は好んで後の笑い話で語っています。黒田は榎本、圭介らを助命した後、彼らを自らの傘下、北海道開発を行う開拓使に迎え入れます。この直後、圭介は大蔵省から外債調達のために欧米出張を命じられました。黒田は「大鳥以上助けになる人物は無い、大鳥を連れて行かれるのは手足を引き抜

かれるのと同様で、困却とはこの事だ、大鳥の洋行は断る」と猛反対しました。多数のお雇い外国人を雇用していた開拓使において、黒田はよほど圭介の力を当てにし、洋行中も帰国を催促しました。この欧米行き自体、戊辰戦争で新政府に莫大な出費を強いた圭介が、その後政府の借金を自分で調達するということ、因果を感じさせるものでした。なお、この時洋行中に出会った伊藤博文により、圭介は工部省に招かれて、日本の工業近代化と発展に尽くすことになりました。

圭介は晩年、枢密院顧問官となりましたが、その時の枢密院議長は黒田でした。圭介より八歳年若い黒田でしたが、明治三十三年、黒田は脳出血で没しました。圭介は息子の富士太郎に「黒田の死は残念なことだ」と書き送っています。

圭介は、自分が育てた教え子に敗北し、自分が翻訳し自分が作った活字で普及した兵書や大砲による敵の戦術に苦戦し、挙句、自分で設計建設した牢獄に自分が繋がれました。そして、自分の育てた弟子に命を救われ、後の人生を与えられました。圭介自身は自らの播いた種に苦しめられながら、私たちは大きく日本の国づくりに寄与し、最終的に圭介を救ったという点も、興味深いです。

「己より出ずるものは己に返るの理なるかと一笑を催せり」と圭介は自らの人生を振り返ります。圭介と黒田の関係は、圭介の人生を象徴しているようです。己の為す所業や人との出会いは、一つ一つが繋がっており、人生における意味があると思わせま